

## エッセイ、ジャーナリストの目

### コロナ禍で揺れ動く大エジプト博物館建設の現状

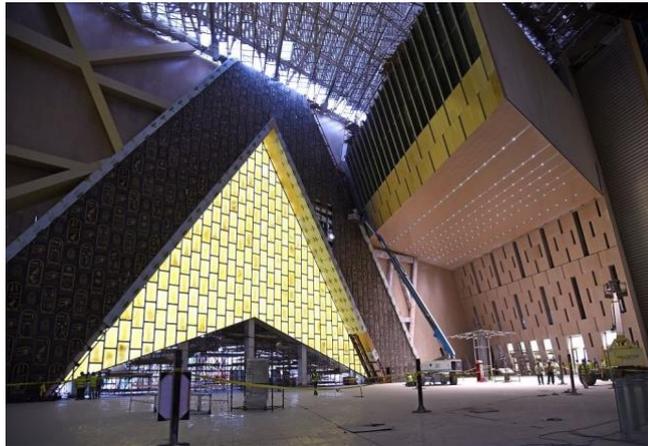
—2021.03.18 JICA 担当者に聞く—

元読売新聞バイルート・ローマ・カイロ支局長、高木規矩郎

#### 1. 大エジプト博物館建設の現状

東京ドーム 10 個分の敷地に世界最大規模の大エジプト博物館（GEM）建設が急ピッチで進んでいる。2008 年から保存修復センター（GEM-CC）で古代エジプトの文化遺産に対する日本の技術協力が始まった。2003 年の日本・エジプト首脳会談を受けての国家間の大事業であり、日本側は独立行政法人国際協力機構（JICA）が円借款で GEM 建設と GEM-CC の技術協力を支えてきた。

#### 大エジプト博物館の入り口、JICA 提供



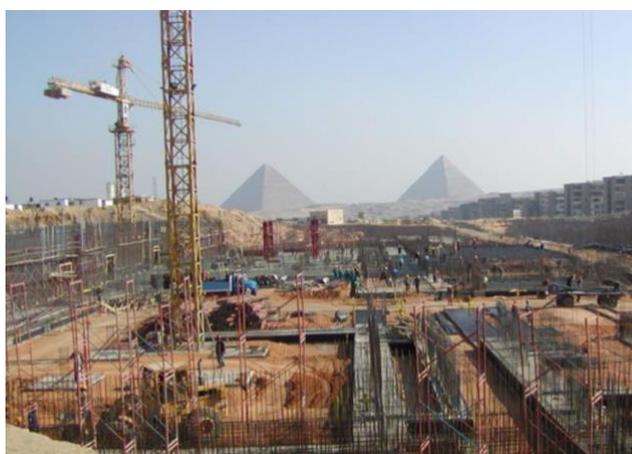
順調に進めば 2015 年秋には GEM 本体が完成することになっていたが、「アラブの春」の民主化運動の激化とその後の政変に伴う治安悪化で、GEM の建設も大きくずれ込んだ。新型コロナウイルスの感染拡大で 2020 年に予定していた開館もさらに延期に追い込まれた。直接 GEM 関連プロジェクトにかかわった JICA の担当者 2 人にコロナ禍での GEM 建設の現状を聞いた。

内藤文弥さんは JICA 本部中東欧州部で観光セクターの大エジプト博物館（GEM）を担当している。北松祐香さんは JICA 社会基盤部都市・地域開発グループ第一チーム主任調査役として 2016 年に始まった GEM-JC（Grand Egyptian Museum Joint Conservation Project）という合同保存プロジェクトを担当している。

### 【GEMの開館延期】（以下、内藤文弥さんの話）

「総論」は全体にかかわる話なので内藤がまずお話しする。もともとは2020年に開館する予定だったが世界的な新型コロナウイルスの感染拡大で、2021年に開館を延期した。今年のいつ開館するのというところは、みなさん非常に気になるところだと思うが、エジプト側の公式な発表では「今年中には開館したい」とだけ言っている。ただエジプト側もコロナの感染状況をみて具体的にいつ開館するのかを決めたいというところなので、オフィシャルな情報では何月何日に開館するという情報はまだ出ていない状況である。

### 基礎工事が進む GEM の本体（2013年撮影、JICA 提供）



### 【エジプトのコロナ禍】

エジプトも日本と同じように新型コロナウイルスの感染というのは気にしていて、感染拡大が今後どうなるかということに影響されているので、状況を見ているというところである。一方で博物館本体の建設自体は今年3月の情報では97%ほどは完成しているというところから発表されている。

大エジプト博物館自体の運営については、今回外部委託されるということが決まっている。運営の委託先はエジプト企業のハッサン・アラムを中心としたコンソーシアムと近日中に契約締結されることになっている。本来ならいつどんなことになっているかの見通しをお話ししたいところだが、新型コロナ感染拡大の状況が止まらないということもあって、なかなかエジプト側も見通しについて決め切れない情勢である。

### 【円借款】

JICAとしてはGEMの建設自体で円借款（有償資金協力）を通じてかかわってきた。約842億円の円借款である。全体額は1400億円ぐらいになる。まず一つ目の大きな支援になる。保存修復の面でもGEM-CCでのプロジェクトで、保存修復センターでの支援を行って

いるほか、運営と展示をする人たちへの能力強化に対する技術支援は別々のプロジェクトである。

### 【第二の太陽の船】

博物館そのものとは話が変わってしまうかも知れないが、第二の太陽の船の復原に関する支援も長年にわたっておこなってきた。黒河内宏昌教授（東日本国際大学）がやっておられることへの支援である。昨年12月から新しいフェーズに入っており、黒河内教授も現地で活動されておられる。第二の太陽の船のGEM移送の現状は、GEMの別館という扱いの「太陽の船展示室」（正式名称は未定）がGEMの別館として建設中である。今後は発掘現場のギザ遺跡の方からGEMの敷地内の新たな作業場に移送されて、復原に向けた作業が進められるという状況になっている。

### 【コロナ感染拡大の影響】

第二の太陽の船の遺物である部材が移送されて、復原に向けた作業が進められることになっている。太陽の船展示室は建設中だが、完成した暁には第二の太陽の船の復原作業を別館の方で行って、観光客にみていただくのがいいのではないかといた計画もあるようだ。

コロナ感染拡大の状況下では円借款の建設利用に関しては、エジプト側が主体的に判断してやっており、JICAはお金を貸しているという状況であり、建設自体は進んでいると言う。

他のプロジェクトについても太陽の船は黒河内教授が現地で活動されておられるし、運営と展示プロジェクトに関しても日本の専門家は現地には入っていないが、遠隔での協力を行っている。コロナ感染拡大の懸念が残っている現状で国としてのエジプトへの渡航について、JICAとしては止めてはいない。プロジェクト毎の渡航可否については、受注者に社（JICAとしていいですか）の方針等を踏まえて、判断してもらっている。

他のJICAのスタッフはほとんどがカイロで業務に従事している。運営と展示の人材育成を行っている専門家は、現在はエジプトに渡航しておらず、遠隔での協力を行っている。コロナ感染拡大という状況ではあっても、プロジェクトはエジプトにとってもかなり重要なもので、工事はストップしないで続いている。工事自体はエジプトが中心となってやることなので、JICAは直接には工事には関与しない案件監理という関わり方である。

### 【保存修復プロジェクト】（以下、北松祐香さんの話）

移送に関しては、GEM-JCプロジェクト専門家（移送を担当する日通を含む）とエジプト側が共同で取り組んでいる。コロナの影響もあり、現在進んでいる分は遠隔での協力が主となるが、現地でエジプト側が確実に移送を実施できるよう、テレビ会議やメールを通じた移送計画策定と実施段階に向けた助言に取り組んでいる。私からはプロジェクトの進

抄の現状からお話ししたい。まず現状だがコロナの感染が広がりはじめていたころは、日本側のスタッフが全員退避している状況にあったが、昨年 12 月から渡航を再開し、今は 2 人の専門家が常駐している。

今取り組んでいる業務は 2016 年から続いているプロジェクト GEM - JC である。今後保存修復センターから隣にある GEM の方に移送することになっているが、その活動についてはちょうど 3 月からエジプト側の準備が進みはじめている。われわれの担当する「対象遺物」72 点の遺物についても近近始まるということは聞いているのだが、エジプト側もカウンターパートを含め、何がいつ動き出すのかという見通しが立てきらないところもあり、計画を立てると同時に進めるぐらいのかなりの急ピッチで取り組んでいる状況である。

われわれとしては 72 点については、専門家も遠隔で参加する予定があるので、事前に移送方法とか、どのような保護をして移送するのかといった計画づくりと助言について今後行う予定である。具体的に 72 点がいつどういう風に移送されるのかということが文書としてはできていない状況だが、72 点の中でも木材、染織品、壁画の 3 分野の中で順番としては木材から始まって、その後に染織品、壁画はもう少し後になるのではないかとされているので、われわれとしても木材に続いてスタンバイしているところである。

#### 【帰国指示は JICA の判断】

昨年 2 月の JICA を含む日本人への帰国指示はエジプト側から言われたわけではなく、JICA としての判断であったという理解である。どちらかといえば常駐していた専門家に、この日までにエジプトから出発してくださいと言うようなお願いがあったと思う。それで日本に帰国した専門家の 1 人がエジプトに戻られたのは確か昨年 12 月だったと思う。

#### 【ツタンカーメン遺物の移送】

プロジェクトでえらばれた 72 点の中でもツタンカーメンの遺物とそうではないものが混じっている。ほとんどがツタンカーメンの遺物だが、すべてではない。壁画とかはツタンカーメンのものではない。(ツタンカーメンのもので GEM の方に移送が終了しているのはどれぐらいか)われわれが対象としている遺物以外にもツタンカーメン遺物が GEM 側にはある。今波のようにどんどん移送されていっている状況で、全体像はわれわれも把握できていない。プロジェクトの管轄外ということもある。移送が始まったのは 3 月の初めからなので、まだそれほどの分量は移送完了になっていないのではないか。

#### 【第二の太陽の船の移送】(以下、再び内藤さんの話)

昨年の 12 月から JICA の新しい支援が始まっている。復原はまだまだだと思う。部材の取り上げはほぼ完了しており、今は最後に残っているものを取り上げている段階である。GEM の敷地内に新たな作業場所を設営しているので、そこに運ぶことになっている。今は移送の最中である。

GEM-CCにも一部の部材を置かせてもらうことにはなっているが、基本的に第二の太陽の船に関しては新しく設営する作業場で作業することになると聞いている。ここに設営していいよという許可を考古省の方から取っているところなので、それが決まり次第すべて移送することになっている。ピラミッド脇の現場からどれほどの距離になるのかははっきり言えない。太陽の船の作業場というのは、あくまでも作業をする場所なので、展示されるのは第一の太陽の船とこれから復原される第二の太陽の船を展示する別館が建設中。第二の太陽の船を復原させるための作業場を今 GEM の敷地内に作る予定である。

### 【JICA の資金の動き】

JICA は GEM 本体の建設のために資金を融資する資金援助をするということもあるが、基本的に JICA のプロジェクトの場合は、その資金を貸したところで終わりではなくて、しっかり建設が進むのか、完成まで見届けるモニタリングの方までしっかりお手伝いをしてるので、お金を貸したあとはお好きにどうぞということではない。新型コロナウイルス感染拡大の現状でも建設自体はストップしていない。建設がどのように進んでいるのか、建設の進捗状態に合わせてわれわれは資金をかけ続けている。コロナ禍でも監理業務は続いている。

### 【コロナ感染拡大の現状は GEM 全体にどのような影響を与えているのか】

(新型コロナウイルスにより JICA が現在抱えている状況はどのようになっているのか) 全体的にコロナから JICA 事業はどのような影響をうけているのかということだが、国によってもコロナの感染状況はことなるので、何ともいえないところではあるが、エジプトに関しては専門家の派遣は再開されている。プロジェクトを進めようというのなら、日本人の専門家の方が現地に渡航していただいてプロジェクトとかそれにかかわる調査はできている。

2018 年 11 月に開催した GEM-JC プロジェクトのシンポジウム (東京藝大) のような形で「コロナ禍の下での GEM プロジェクト」といった報告会やシンポジウムの開催の予定はない。どちらかというといろいろ課題が出てきて、日本人が渡航できない状況の中で、遠隔でどのように支援するかとか、開館に向けて急ピッチで進んでいる移送をどうするかとか、展示分野で日本として協力できることはあるのかといった協議をしている。報告できるようにはまとまっていないという状況もある。コロナを乗り越えて開館に向けてメドがついたところで、改めて今年中をメドにしてシンポジウムを開催できればと期待している。前回からの進捗ということで、コロナ下でこのように進んでいるというような報告はできると思っている。

## 2, アラブの春後のエジプトと大博物館建設の意義

2011 年に始まった民主化運動「アラブの春」でエジプト、リビアをはじめ中東各地で政権があいついで倒れ、イスラム国のテロが続くと中東は外国人を寄せ付けない危険地域となった。そこで私は工事が完成したら大エジプト博物館 (GEM) を見に行くことを最終目

標にあげた。ツタンカーメンのコレクションをはじめ人類の貴重な遺産を展示し、古代エジプトの文化や技術を学ぶことができるという GEM の魅力に惹かれての秘かな決意である。

JICA は政府開発援助 (ODA) の実施機関として、エジプトに対し 842 億円 (約 4.5 億ドル) の有償資金協力 (円借款) を行い、GEM プロジェクトを支援するという古代エジプトの文化財保存修復への高邁な目標に惹かれた。2008 年から 2016 年にかけて大エジプト博物館保存修復センター (GEM-CC) の人材育成のために派遣された 180 人を超す専門家は、予防保存、保存修復、保存科学、その他の 4 分野で合計 24 のテーマで 2250 人の研修生に対し、研修を行ってきた。

2014 年 2 月初めに東京文化財研究所客員研究員 (当時) の松田泰典さんに話を聞くチャンスがあった。松田さんは保存修復が専門でエジプトに滞在中に 2011 年の革命と 2013 年の政情不安で 2 度にわたり国外退避を経験していた。「技術指導を通じてお金だけでもってくればよいというエジプト側の対日観に変化が出始めている」と地味な研修活動の成果を評価していたのが印象的だった。

2016 年 11 月からは「大エジプト博物館合同保存修復プロジェクト (GEM - JC) が始まった。GEM に展示される遺物を共同で修復する技術支援についてのエジプト政府からの要請が JICA にあり、この要請を受けて動き出した。ツタンカーメンの墓から出土した文化財を含むエジプトの至宝の調査、移送、保存修復を日本とエジプトの専門家が共同で行うことで、GEM 職員の人材育成と技術移転を図っている。

## 【第二の太陽の船プロジェクト】

「第二の太陽の船」は東日本国際大学の吉村作治学長を所長とする NPO 法人太陽の船復原研究所が、JICA の支援 (技術協力) で船ピットから取り上げた部材の保存修復、GEM への移送を続けてきた。今後は、ギザ遺跡にある保存修復用の建物などを解体し、GEM 敷地内に移設させる予定である。

2011 年 6 月にピットの上部にあった石蓋を取り上げたことで発掘が始まり、約 1200 個の部材が埋設されていた。2020 年 3 月には全部の部材が取り上げられ修復・保存処理されて GEM-CC (大エジプト博物館保存修復センター) の倉庫に収納されていた。1 年かけてコンピューター上に完成モデルができれば、それから 5、6 年かけて組み立てを行う。

エジプトでの新型コロナ感染拡大で日本人スタッフが帰国してからエジプト人スタッフによって 2020 年 3 月には最終的に全作業は終了した。現在クフのピラミッド南側の「太陽の船博物館」には、1954 年から 82 年にかけて、エジプト考古省によって発掘・組立・復原が行われた「第一の太陽の船」が展示されている。いずれ「第二の太陽の船」が修復されたら、同じ博物館に移送されることになっていた。

## 【コロナで狂い始めた GEM のスケジュール】

新型コロナ感染拡大で「第二の太陽の船」以外の GEM プロジェクトにも大きな影響が出始めている。GEM-JC プロジェクトは順調に進み、東京で行われた JICA 主催のシンポジウムでも日本から派遣された専門家の協力の成果が報告された。これまでも治安悪化やイスラム国によるテロの脅威などでエジプト側も GEM の開館予定の延長を迫られてきたが、今回のコロナ騒ぎで、「2020 年 10 月」という開館日時も再延長せざるを得なくなった。

早稲田大学古代エジプト調査隊の隊長として半世紀以上にわたってエジプトでの発掘調査を続けてきた吉村作治隊長は、東日本国際大学（福島県いわき市）の学長として長い伝統をもつ調査隊の新たな拠点づくりを進めている。とくに「第二の太陽の船」については JICA との協力関係を強化している。昨年 8 月「コロナ危機と GEM」ということで話を聞いた。

「何回か開館を延長してきた GEM については、新型コロナ感染拡大の影響もあって、エジプト考古省は今年 10 月に予定していた開館はあきらめたようだ。1 年後とか 2 年後といっているが、実際には誰もわからないのではないか。GEM を開いても観光客は誰も来ないのではないのではないか。ギザ周辺ではコロナ感染者は誰もいない。現場にもいないし、GEM でも誰もいない」

JICA は 2016 年に完了した 8 年に及ぶ大エジプト博物館保存修復センター（GEM-CC）プロジェクトで小冊子「写真と年表でふり返るプロジェクトのあゆみ 2008～2016」を発行し、「これまで日本とエジプトが培ってきた信頼関係をもとに、GEM が世界に誇れる博物館になるよう、これからも幾多の取り組みが両国の間で行われることでしょう」と高らかに述べていた。

でもこの誓いのフレーズの直前にあった「GEM は 2018 年の部分開館、2022 年の全面開館を目指している」という期待はいずれも実現しないまま新型コロナの感染不安の時期に突入してしまった。コロナ禍はいつ収まるのか、まったくあてのない不安な日常が続く中で JICA にとっては GEM のプロジェクトそのものが正念場に立たされているといえる。

### 【GEM 訪問が私の最後の「中東の旅」に】

完成したら妻と一緒に一生の思い出として GEM を見に行こうと話している。カイロにはアラブ連盟の東京駐在として 1970 年代を過ごし、私がカイロ駐在の時は家族のように迎えてくれた Ali Sawi 一家が 50 年後の今も元気に暮らしている。Ali と旧交を温めるのも目的の一つである。

GEM-JC プロジェクトが動き始めた 2016 年ごろからカイロ再訪計画を温めてきた。だが 5 年ほどの間に GEM 開館計画が延長され、「2021 年開館」としても最終的な日程はまだ煮詰まっていないようだ。私は今年 1 月に 80 歳になった。GEM 訪問の夢を胸に秘めて揺れ動くエジプト情勢、中東情勢を見守っていきたい。